あつぎ・森の里九条の会

2024年3月

～今を新たな戦前にさせない～

結成：2009年

代表/平川高人　電話：090-3338-7027　事務局/046-248-0632

例会

4月7日（日）
10：00～12：30
森の里公民館3F会議室

懇談会・ドキュメンタリー映画

9条改憲、原発、ガザ攻撃、ウクライナ侵略戦争、物価高、地域の問題などについて話し合い、共感し合いませんか。

ドキュメンタリー映画

荒野に希望の灯をともす

～医師中村哲現地活動35年の記録～

日　時：4月7日(日) 開場10:00
上映開始10:15

場　所：森の里公民館3階会議室

参加費：無料

「9条改憲、原発、ガザ攻撃、ウクライナ侵略戦争、物価高、地域の問題などについて話し合いませんか？」

1月14日（日）

2021年8月放送のNKHスペシャル「銃後の女性たち～戦争にのめり込んだ〝普通の人々〟～」を見ました。戦争に協力することに反対していた、女性運動家市川房枝元参議院議員でさえ、時代の流れに逆らえなくなりました。共謀罪や戦争法、敵地攻撃能力※の保有などによって、日本は今、新たな戦前化が急速に進んでいます。これ以上事態が悪化しないうちに、この流れを止める必要があります。

※日本体育大学の清水雅彦さんによると、敵基地だけでなく必要なら関連する他の所も攻撃するので、「敵基地攻撃能力」は適切ではない。反対運動をしている人たちには、「敵地攻撃能力」という言葉を使ってほしいとのことでした。（2023年11月3日の憲法公布の記念日に、国会前集会で）

かっぽう着にたすき掛け。戦時中のドラマでたびたび登場する「国防婦人会」の女性たち。新たに発見された資料や取材から、戦争を支えた女性たちの意外な「思い」が明らかになった。女性の活躍の場が少なかった時代、「国防婦人会」への参加は「社会参加」の機会だった。「社会の役に立ちたい」と懸命に生きた女性たちが、なぜ自身を抑圧するようになったのか。戦争に協力していった女性たちの、これまで語られてこなかった心の内に迫る。（番組の解説から）

▼言葉が見つからない。今の時代もこの時代と似ていると思う。

▼祖母が国防婦人会に入っていたと言うことを聞いたことがある。戦時中、婦人会の活動を一生懸命やっていたらしい。

▼真面目な人たちが軍に利用された。

▼自然発生的に生まれた婦人会が軍に利用された。

▼沖縄やアイヌの人たちの文化や言葉まで標準化されていったことは恐ろしい。

▼徳之島や奄美の人たちにも方言でなく、標準語で話させた。方言で話すと、スパイをしていても何を言っているか分からないからだ。

▼「隣組」で互いを監視させた。

▼ロシアとウクライナの戦争でも若者が戦争にかり出されている。

▼勇ましいことばかりが宣伝されて、戦争の本質が分からなくなっている。

▼見ているだけでも涙が出そうだ。NHKがこういう番組を制作していることはすごい。

▼もっと多くの人にこのビデオを見てもらいたい。そして戦争の本質について考えてほしい。

▼戦争は始めると終われない。

▼国が軍備増強をしているにもかかわらず、どうして反対しなかったのか。

▼先生をやっていた人が国防婦人会で話していたことを恥ずかしく思い、二度と教壇に立たなかったが、自分が子どもの頃には、軍隊帰りの先生が生徒同士でビンタさせていた。

▼ロシアではSNSを使う若者

は別だが、年寄りはテレビの情報だけで判断している。
▼戦争に反対を貫いた人たちもいた。
▼能登半島地震が起きて、裏金事件に関わった人たちはホッとしているのではないか。国民の目が裏金事件からそれたから。
▼共産党以外は政党助成金をもらっているから、立憲民主党も裏金事件を強く追求できない。
▼企業、団体献金は禁止すべきだ。
▼学校で近現代史を教えないことは問題だ。古代や中世などに時間をかけ過ぎている。
▼韓国では伊藤博文を暗殺した安重根は英雄だ。
▼日本ではかつて伊藤博文がお札の肖像画に使用されていた。

スタンディングと署名活動

2月18日（日）

買い物客が途絶える時間帯だったためか人が少なかったのですが、ニュース「あつぎ・九条の会」は、多くの方に受け取っていただけました。「ご苦労様。」「頑張ってください。」うれしいものです。ある女性は何と、「安倍元首相の国葬反対デモなど、たくさんのデモや集会に参加してきました。」すごい！他の九条の会の会員だそうですが、私たちのあつぎ・森の里九条の会にも入会していただきたいと思いました。

読者の広場

一度読んで忘れられない箇所にまた出合いたくなる。２度、３度、同じくだりに来るとまた、負の感銘を反芻できる。古書再読の楽しみだ。

「方丈記私記」（堀田善衛）

堀田は１９４５年３月の東京大空襲の惨禍と、約７２０年前に京都で起きた天変地異による寺社の焼失、飢餓などの災厄をつぶさに記録したドキュメンタリー風エッセー「方丈記」（鴨長明）を比較する。

20万人を超える死傷者を出した東京だが、深川辺りの被災地は特に惨憺たるものがあった。あらかじめ瓦礫は片付けられ、小豆色の高級車に乗って天皇が到着する。あまつさえ勲章まで提げている。被災者は土下座して彼を迎える。肉親を失い、家屋を焼かれた無辜の民は、今次大戦の最高責任者を非難することはない。むしろ焼け跡に額をつけ、涙を流して「歔唏（きょき）」している。こんな惨状を防ぐこともできず、申し訳ないとの「優しさ」からの行動なのだ。そして天皇をはじめ政治の中枢にいる者たちが「人民の優しさに乗ることは許されない」、と堀田は指弾する。天皇が「このこと視察に出て来ることは、現実には不可能なこと」のはずなのだから。

かつて宮内庁記者会との会見の席で、天皇はヒロシマ、ナガサキの原爆投下について問われ「そういう文学的な質問には答えられない」などと、戦争責任に触れることはなかった。羞恥心など皆無であり、その傲岸さを露呈して臆しない。作家住井すゑは、塗炭の苦しみにあえぐ庶民の存在、その「諸悪の根源は天皇制にある」と喝破した。

「サンダカンの墓」（山崎朋子）

大宅壮一ノンフィクション賞を受賞した「サンダカン八番娼館」は女性史研究家山崎の代表作だ。明治から大正時代かけて、「春を鬻（ひさ）ぐ」ために、九州・長崎、熊本からボルネオ、マレーシアへ多くの女性たちが女衒（ぜげん）の口車に乗せられ、人身売買された。彼女たちを「からゆきさん」と呼ぶ。

山崎は異国の地で亡くなり埋葬された彼女たちの墓地を訪ねる。「滂沱（ぼうだ）」の山崎は立ち尽くす。望郷の念抑え難いはずなのに、墓石は一様に日本に背を向けていた。性の奴隷は日本帝国が企んだ植民地造りの先兵であったのかも知れない。

（了）　ＭＫ

※事務局では皆さんからの一言を募集しています。身近なエピソードやつぶやき、森の里のトピックスなど、何でもよいのでお寄せ下さい。先にお配りした葉書もご利用ください。

パンジー

スタンディングと署名活動のお知らせ

日時：3月17日（日）10:00～11:00
場所：スーパー三和前
★どなたでもお気軽に参加大歓迎です。
★手作りの表示板の用意あります。
例）「キシダ政治を許さない！」
「9条壊すな！」
「NO　WAR！」
「大軍拡・大増税反対！」